

いちじく・露地栽培（品種：柘井ドーフィン）

香取農林振興センター

1 地区名

香取市佐原地区

2 栽培戸数、面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

- (1) 栽培戸数 2戸
- (2) 栽培面積 56 a
- (3) 収穫量又は出荷量 5,600kg (1,000kg/10a)
※未成園のため収量が少ない。
- (4) 出荷先又は販売方法 直売

3 ちばエコ基準達成状況

区 分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬(成分回数)	7回	9回
化学肥料(窒素分量)	3.12kg/10a	8 kg/10a

4 事例のあらまし

香取市では、以前より少数の農家がいちじくの栽培を行っていましたが、ここ数年栽培に取り組む人が増え、栽培面積が急速に伸びています。このうち、2～3年前に新規導入し、個人で直売を行っている2戸の農家が、商品の差別化を図るため、平成20年度からちばエコ栽培に取り組み始めました。

この事例は、水田転換園での栽培事例で、有機質の補給のため、マッシュルーム菌床たい肥による土づくりの他、自家製の有機質肥料などを使用しています。

また、害虫対策として、予察を徹底する他、アザミウマ類による被害防止を目的に、反射マルチを利用することにより、飛来数を半分に抑えることができました。

香取地域におけるいちじくのちばエコ栽培は、今回が初の取組でしたが、計画認証を受けた2戸の農家とも栽培基準をクリアし、「ちばエコ農産物」認証を受けることができました。

5 背景・動機

香取市では、北部の水田地帯において30年以上前にいちじくの栽培が始まりましたが、冬期に寒害の被害を受けるため面積は広がらず、生産者は数名で推移していました。ところが近年、新規にいちじくの栽培に取り組む人が増え、現在、香取市内の生産者は約

15名、栽培面積は今年定植の分も含めると2.9haと急速に拡大しています。その背景として、水田の有効利用、退職帰農者の増加、冬期に寒害を受けにくくなったこと等があげられます。

販売方法は、従来からの生産者は市場や業者等への出荷が中心ですが、新規の生産者は、庭先販売や道の駅等での直売を昨年から始めています。直売では特に味が重要なため、完熟出荷や自家製の有機質肥料の使用など、こだわりの生産を行っています。さらに「環境にやさしく、安全・安心」という付加価値を付け、商品の差別化を図るため、平成20年度から2名の生産者が「ちばエコ農産物」栽培に取り組み始めました。



反射マルチの設置試験



防寒対策の勉強会

6 栽培方法

(1) 土づくり

栽培ほ場は水田転換園です。有機質の補給による土づくりのため、12月中旬にマッシュルーム菌床たい肥を1.5 t / 10 a、畝表面に施用しました。また、土壌酸度の調整のため、苦土石灰を100kg / 10 a 施用しました。

(2) 冬期管理

寒害防止のため、12月下旬に主枝に稲わらを厚く巻きました。

また、敷きわらやマルチを除去するとともに、園内の病原菌密度を低下させるため、落葉、果実を集めて園外に持出しています。

(3) 施肥

基肥は1月下旬に、自家製のEMぼかし肥料（米ぬか、油粕、魚粕、蟹殻、糖蜜を発酵させたもの）を300kgと、有機配合肥料を60kg施用しました。

追肥は6月と8月に有機配合肥料を施用する予定でしたが、結果枝が太く伸び、樹勢がやや強すぎる様子であったため施用は控えました。

(4) 枝管理

5月に余分な芽をかき、結果枝を45cm間隔に配置し、7月中旬に15～18段程度を残して結果枝先端を摘心しました。

(5) 害虫防除

カミキリムシ類に対しては、枝をよく観察し、成虫は見つけ次第捕殺、幼虫は食入部位から針金を入れるなどして刺殺しました。

アザミウマ類に対しては、園内に青色粘着トラップを設置し、7月中旬に飛来数が増加してきたことを確認してから、殺虫剤の散布を行いました。

また、ほ場の一部で、アザミウマ類による被害防止を目的に、反射マルチ（商品名：ネオポリシャインクロスT87）の設置試験を実施しました。6月中旬に畝に反射マルチを被覆したところ、試験区はアザミウマ類の飛来数を無処理区の半分に抑えることができました。果実への加害程度は、1～6段目の果実において、被害果率が無処理区の14%から10%に低下しました。

(6) 雑草防除

畝上には6月上旬に稲わらを敷くことで雑草の発生を抑え、畝間とほ場の周囲のみハービー液剤を散布し除草しました。

ア 栽培管理

作業名	実施年月日
収穫開始	8月27日
収穫終了	11月20日

イ 使用資材

(ア) 土づくり・施肥等

(10aあたり)

使用銘柄 (N:P:K)	実施年月日	施用量	全 N	化学N
マッシュルーム菌床たい肥	平成19年12月14日	1.5t		
苦土石灰	12月14日	100kg		
EMぼかし肥料 (3.2:5.2:1.7)	平成20年 1月28日	300kg	9.6kg	0kg
くみあい有機入り24号 (8:8:8)	1月28日	60kg	4.8kg	3.12kg
合 計			14.4kg	3.12kg

(イ) 病害虫・雑草防除等

使用農薬	対象病害虫	実施年月日
トップジンM水和剤	そうか病、黒かび病	平成20年7月17日
アディオン乳剤	アザミウマ類	7月17日
コテツフロアブル	ヒラズハナアザミウマ	7月23日
アクタラ顆粒水溶剤	アザミウマ類	8月3日
モスピラン水溶剤	アザミウマ類	8月11日
アンビルフロアブル	さび病	8月20日
アミスター10フロアブル	疫病、さび病	9月23日
※ハービー液剤	畑地一年生雑草 畑地多年生雑草	5月9日、7月13日

※印は、「化学合成農薬に含めない農薬」

7 今後の展望等

生産面では、本年はちばエコ基準内での栽培が実証されましたが、来年以降に向けての課題も残りました。

まず施肥について、本年は定植2年目で収量も700kg/10aと少なく、樹勢が強めであったため追肥を行いませんでしたが、今後成木の収量に見合った施肥の量やタイミングを検討していかなくてはなりません。また、防除について、樹齢が進むに従いネコブセンチュウの防除などが加わってくる可能性があり、農薬の散布回数をさらに抑えるための工夫が必要になってきます。具体的には、今年ほ場の一部で試験を行い、効果が確認できた反射マルチによるアザミウマ防除の取り組みを拡大していきます。

販売面では、今後この1、2年に植え付けた樹の生長とともに収穫量が増大し、直売だけでは地域内で供給過剰となる恐れがあります。直売では「ちばエコ農産物」のPRとともに、完熟のいちじくの美味しさをより多くの消費者に知ってもらい、いちじくの消費を伸ばす活動が必要です。また、個別の生産者を組織化し、市場出荷や契約販売等による販路の拡大も検討していく必要があります。